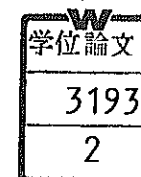


【博士学位論文概要書】

道学形成史の研究

土田 健次郎



本論文の目次は以下の通りである。

序章

第一節 宋代思想史研究上の根本問題

一、思想と思想史

二、思想史における変革期

第二節 道学研究上の根本問題

一、道学とは何か

二、道学資料の独自性

第一章 北宋の思想運動

第一節 慶曆前後に至る思想動向

第二節 欧陽脩—中央の動向

一、研究の問題点

二、理

三、人情

四、自然と簡易

五、欧陽脩から王安石へ

第三節 陳襄—地方の状況

一、問題の所在

二、新たな講学者たち

三、講学の内容

四、性善説と顔子好學論

五、『周易講義』の性格

六、陳襄の学問の行方

第二章 二程の先行者

第一節 胡瑗—程頤の師

一、問題の所在

二、樂論と教育論

三、『易経』解釈

四、胡瑗の学問と程頤

第二節 周程授受再考

一、周敦頤神話の検討

二、二程の態度

三、程門の姿勢

四、連続と断絶

第三節 宋代史上における周敦頤の位置

一、周敦頤の思想傾向

二、周敦頤の思想の由来

三、宋初古文家の性格

四、周敦頤から二程へ

第四節 二つの太極図

- 一、周敦頤「太極図」の種々相
- 二、「太極図」の思想

第三章 程頤の思想の基本構造

- 一、天理
- 二、善と悪
- 三、対仏教の意識
- 四、万物一体と敬
- 五、気

第四章 程頤の思想と道学の登場

第一節 程頤の思想における「理」の性格

- 一、初期道学者の連帯感
 - 二、程頤の「理」論の骨格
 - 三、道学の万物一体観
 - 四、程頤の「理」の概念
 - 五、善悪と訓詁
- 第二節 「理気二元論」観の検討
- 一、問題の所在
 - 二、道と陰陽
 - 三、性と気

四、稟氣と氣化

- 五、感応、盛衰、消長
- 六、真元の氣

第三節 程頤『易伝』の思想

- 一、『易伝』の意義
- 二、『周易正義』批判の二方向
- 三、『周易正義』批判の立脚地
- 四、『易伝』の方向
- 五、『周易正義』、胡瑗の易理解
- 六、『易伝』の易理解
- 七、『易伝』における理
- 八、『易伝』の諸特徴

第五章 道学と仏教・道教

第一節 道学と仏教における議論の場と範疇

○ 序説

- 一、共通の場の形成
- 二、道学が得たもの

第二節 道学と華嚴教学

○ 序説

- 一、「止」による仏教批判

- 二、法界觀の理解
- 三、程頤「易伝序」の問題
- 四、理性
- 五、仏教批判の場における「理」

第三節 死の問題から見た道学の仏教批判

○序説

- 一、道学の死生観
- 二、道学以後

第四節 二程の気論と道教

- 一、程顥
- 二、程頤

第六章 道学対立者の思想

第一節 王安石における学の構造

- 一、問題の所在
- 二、『周礼義』の性格
- 三、『字説』の性格
- 四、王安石の制度論
- 五、「二道德」の意味
- 六、王学と道学

第二節 蘇軾の思想的輪郭

○序説

- 一、道
- 二、性
- 三、天と人
- 四、科挙
- 五、仏道

○結語

第七章 道学の形成と展開

第一節 晩年の程頤

○序説

- 一、崇政殿説書
- 二、涪州流謫
- 三、晩年

第二節 楊時の立場

○序説

- 一、反王学の立場
- 二、祖述者の立場

○結語

終章

第一節 道学史上における朱熹の位置

第二節 朱熹道統論の性格

- 一、二重の正統性
- 二、伝燈論との差異
- 三、師道論
- 四、相反する二要素
- 五、道統論のゆくえ

以下、章をおって梗概を述べる。

【序章】

従来の中国思想史は、思想史として既に潤色されたものをつなぎあわせる形で叙述されてきたが、それでは各思想の成立当時の具体的状況が捨象されてしまう。そこでまず思想が登場した当時の状況にたしかえって各思想の具体相を明らかにし、次に後代それが思想的に整序されていく姿を把握するという手続きが必要となる。また潤色された思想史はそれ自身が思想的主張でもあって、なぜかかる思想史が描かれたのかも同時に問われなければならない。本論ではかかる問題意識から従来の道統論的道学史を洗いなおし、新たに道学形成史を構築することを試みる。

道学は北宋から南宋にかけて成立したが、その前後の思想の転換点としては、①唐の中期、②北宋の慶暦年間、③宋の南渡、の三つの時期があげられる。①は唐初の国際的文化

から漢民族中心への思想の内向化、②は新興士大夫の改革運動に連動する新思潮の登場、③は士大夫の中央から地域への志向の変化に伴う議論領域の変化、である。そして道学形成史との関係は、①は道学形成の遠因、②は道学登場の母胎、③は道学の勢力拡張の機縁、となる。今まで指摘されることが無かったが、これらの転換期ごとに、思想家の社会的位置と、その議論の領域と表現手段は変化していった。道学もそれに応じて登場し、自己主張し、勢力を拡大していく。

ところで道学研究で注意すべきなのは、最初から道学という名の学派があったという一般的な通念は誤りであること、「道学」という語は当初普通通名詞として使用され、それが程頤以後になって一つの学派を指す固有名詞になっていったことである。また道学研究においては、口語の語録類という資料上の特殊性、言語を超えた境地をあえて説くために起こる表現様式の独自性もおさえておかなければならない。

【第一章】

道学形成史でまず問題にすべきなのは、宋代が宋代らしくなった仁宗朝の慶暦年間に起こる新たな思想運動であって、それは序章で論じた転換期の②にあたる。この慶暦年間に、范仲淹を中心とする政治革新運動と、それと連動する「慶暦新義」という思想運動が起こった。これが唐の中期以降、在野ではぐくまれていた思想を中央で受け止める受け皿となった。初期道学者（この時代はまだ道学というまとまった学派はなかったが、学派としての道学形成に寄与した中心人物たちをこのような名称で括っておく）もこの気運に乗じて中央に名乗りをあげていく。

慶曆以後この新思潮のオピニオンリーダーとして政界学界の指導的存在であったのは歐陽脩であった。彼は「理」、「人情」、「自然」、「簡易」といった語を常用し、それによって万人が同意を得る部分を確定し原理化しようとした。それは慶曆士大夫が持っていた志向の共通部分を定式化する試みであった。そしてそのうち「理」の用法などには、程頤と共通する要素も見られるのである。

歐陽脩は中央の新たな動向の体現者であったが、その革新運動は地方に波紋を広げ浸透していく。それに対して各地で講学者が反応したが、その典型的存在として陳襄がいる。彼は初期道学者と類似する思想を持ちながら道学者ではなかった。道学的思想といわれてきたものは実は道学のみの特徴ではなく、各地に存在していたのである。これらは各地域で講学し門弟を持ち、同類の思想家と交渉を持つという存在形態と、儒学の純化と聖人への希求という思想方向において、初期道学と同類であった。陳襄の他、王開祖、黃晞、章望之などはその代表である。かかる地方発信の類似の思想の中で、初期道学者はその個性の提示を図ったのである。

【第二章】

道学はもともと程頤学派であるが、その祖の程頤の師は、胡瑗と周敦頤であった。この両者を見ることは、道学の淵源の解明に資するところが大きい。当時の太学は儒学再興運動の拠点であり、そこで新たな士大夫像の提出を担った胡瑗は、慶曆士大夫の問題意識を明確化しつつ、科挙の基準として権威のあった『正義』に対して全面的批判を展開した。そこには士大夫の行動原理としての経書の意義の復活、『周易正義』の無の思想の否定、

などが濃厚に見られる。胡瑗や同じく太学で活躍した孫復は在野の学者であり教育者であったが、范仲淹によつて組織的官僚養成を期待された太学の教官に拔擢された。その門下からは科挙合格という正面きつた形で中央進出者が相繼いだ。在野的なものが中央に入り込む典型的な形がそこに看取できる。太学の学生であった程頤はこの胡瑗に拔擢され、それが機縁となり、彼が在野で培っていた思想が胡瑗らの新たな中央の問題意識の中で体系化されていくのである。

もう一方の周敦頤は、従来は常識的に宋代道学の祖とされてきたが、それは虚妄である。まず周敦頤と二程の間に「周程授受」は事実ではなく、それは二程自身と二程の門人たちの資料から実証できる。しかも周敦頤の思想を分析してみると、後の道学に連結するといふよりも、むしろいわゆる「宋初古文家」に類するものであった。程頤は周敦頤の忠実な継承者ではなく、それを脱皮することで自己の思想を生み出していったのである。道学の祖としての周敦頤の表彰は朱熹から始まり、朱熹はそのために周敦頤「太極図」の修訂を行うが、実際には朱熹が否定した旧図の方が周敦頤の思想に合致する可能性があり、しかもその旧図は、程頤が否定した思想の型に合致するのである。

【第三章】

道学形成史の中心的存在である程頤は、「二程子」としてその兄の程顥と一体のものとしてされた。果たして両者の間に思想的差異があるのか。それを見るためにはまず程顥の思想の検討から始めねばならない。程顥の天理の提示は著名であるが、従来これは学問修養の果てに最終的に達する万物一体の境地の表明とされてきた。しかし資料を見る限り程顥は、

むしろ善悪がともに実在する現実の確認としてこの語を用い、その背後には強烈な仏教批判の意識があった。程頤は眼前の善悪共存する倫理的現実を議論の出発点にし、理のほらむ二重の意味（やむをえぬ趨勢と、かくあるべき規範）を利用して、本来の境地への連続的到達を目指した。次章で論じるように両者の間には思想的差異が存在するが、現実態から本来性へという方向性と、理の語の使用が、両者に共通し、両者共通の万物一体観ともあいまって、二程一体という通念の形成に資したのである。

【第四章】

道学を創設したとされてきた所謂「北宋五子」のうち周敦頤が除外されることは既に明らかにしたが、他の程頤、程顥、張載、邵雍も一つの学派を形成していたわけではなかった。血縁と地縁で結びついた彼らはそれぞれが弟子を持ち講学していた。ただ彼らには万物一体観という共通の思想基盤があり、それが思想上でも連帯感を形成していた。それらは彼らの相互評価のしかたの検討によって知られる。図式化して言えば、程頤は万物一体をそのままの形で提示し、程頤はそれを「理」の「一」として捉え、張載は「氣」と「太虚」の論に結実させ、邵雍は「数」の秩序とした。程頤によって個別的秩序としての「理」が導入されたことにより、個別的秩序の完遂と、万物一体の体験が共存しえるようになった。程頤は個別的秩序を解消するのではなく、積極的にそれになりきることで、万物一体が得られるとした。程頤は、程顥との対比においては、善悪峻別と訓詁重視の点でその個性が際だつたが、それはこの理の導入による。また程頤の主著は『易伝』であるが、程頤はそこで胡瑗の問題意識と易解釈の手段を継承して、当時いまだに科挙の標準として

權威を持っていた『周易正義』を超越しようとした。彼は『正義』の立場を無の思想と強引に規定したうえでそれを否定し、体用論を導入して、有の次元における原理として「理」を提示した。なお程頤に既に理氣二元論があると言われてきたが、程頤の場合は理と物の関係論である。

【第五章】

以前から常識のように言われてきた二程における仏教と道教からの影響にも、検証を加える必要がある。まず単に「理」や「体用」の語を使用することをもって仏教からの影響と短絡できないことは、二程の仏教に対する知識の質とかかる概念の用法の検討によって知られる。むしろ聖人の聖性を内心と外物の反応関係に見出すという発想の熟成に、仏教からの触発がある。それ以外の点では部分的に仏教に啓発された点があったにしても、副次的なものである。道学という「理」の概念の多用から華嚴教学からの影響が云々されるが、個々の例を検証してみると、直接に影響を受けたというよりも、道学者たちが次第に華嚴教学の中に自己の思想と類似点があることに気づいていったという点が強い。道学ではむしろ「理」を持ち出して仏教批判をすることが多い。また居敬をはじめとする修養法には禅、坐忘、内丹などから得たものもあるが、同時に二程らはそれと一線を画す姿勢を取る。更に他の儒者が敬遠した死の問題に対しては、道学は積極的に取り組み、程頤はその「自然」によって程頤は「太虚」の論によって、この仏教の牙城をも陥れようとした。

道教との関係では「氣」の用法が問題となるが、二程は道教で醸成された養気の方法を一部で取り入れつつも、肉体的効果以上にその意義を拡大していくことには拒否的であっ

た。

【第六章】

二程、特に程頤が最も敵愾心を抱いたのは王安石と蘇軾である。この両者の思想を見ることは、程頤が当時意識していたものがいかなる思想であったのかを知る最大の手掛かりになる。まず王安石は一般に言われてきたような単なる制度至上主義者ではなく、彼の制度と文字の重視の中には斬新な世界解釈の方法論があった。それは仮説と検証を繰り返すという独自のものであって、士大夫の学問的合意をいかに成立させるかという歐陽脩以来の課題に正面から取り組むものであった。もともと彼の問題意識は、皇帝から委嘱された「道徳を一にす」であつたのであって、従来のように彼の学問の無思想性を言うのはあたらぬのである。むしろ王安石は学の体系化を志向したのであって、それゆえ体系志向の道学は王安石と同じ土俵で対抗でき、王学否定の代表的存在になつていくことが可能になつたのである。

蘇軾と言えば文人と規定され、その無思想性が程頤との対立を呼び起こしたかのように言われるが、彼は単なる文学至上主義者ではなく、独自の形で濃密な思想論議を展開していた。蘇軾は当時の共通の論題であつた道や性に対して、禁欲的な認識限界論を極めて理論的に展開しているのであって、それは道や性の全面的了解を目指す程頤と思想的に激しく対立する性格のものであつた。後に道や性の把握の可能性自体を問う意義は次第に忘却されていき、それとともに蘇軾の問題意識は忘れられ、彼の議論も道学の道論・性説の枠組みの中で批判対象として再定式されていく。

【第七章】

程頤は崇政殿説書として中央で活動したが、人事問題などからまつた党派争いのため中央から追われ涪州に流され、許されて帰還するが、晩年また弾圧を受ける。その過程で程頤のもとには弟子が集散し、それが後の道学展開の基盤になる。道学の特色である地域での講学は、学派の連続性を保証するものとなり、また程頤の晩年の衣服や生活スタイルは道学特有の雰囲気醸成していく。

程頤の理の思想は、中央と地方の別にかかわらず行動の原理をもたらすものであつた。程頤やその門下は中央と地方を行き来するが、その両方に基盤を置きえことが、この学派の生命力の持続につながつた。

程頤の学派が弾圧を受けながらもまとまつた勢力を獲得していくうえで最も功績のあつたのは楊時である。蔡京専権時代の最末期に中央に入った楊時は、蔡京の政治の罪を王安石に帰する風潮の中で、王安石に対する学問的批判に力を入れた。それは王学対道学という図式を作り出すこととなり、それを機縁として南宋初期に道学は社会的勢力を伸張した。また拡張していく道学は次第に内部分裂に悩まされ始めた。その最大の要因は、それぞれが所有する二程の口語語録が多様な二程像が描く根拠になつたことである。その解決として楊時は二程の語録の集成を図つた。この集成の試みは完成を見なかつたが、その問題意識を継承した朱熹によって目的が果たされた。

【終章】

先の四者のうち程頤以外の三者が没した後、その弟子の一部は、長命であった程頤の学派に吸収され、ここまとまった学派が形成されていく。これが道学である。当初の道学は、程頤学派を指す。宋の南渡後、既に南方に足場を得ていた道学は、王学の批判者として注目されたこともあいまって勢力を拡大する。ただ道学は「程子」という教祖を崇拝し、語録という經典を持ち、衣服などに特徴を持つという宗教結社的人格が濃厚であった。朱熹はこのような道学に士大夫社会での市民権をあたえようとした。朱熹の主著が『四書集注』という経注であるのも、このことと関係する。後に元になって朱子学が国教化されたのは、朱熹が科挙の標準となるのに堪える注釈を作成していたからである。

朱熹の道統論には、儒学における道学の正統と、道学における朱子学の正統という二つの正統の主張が内包されている。それは朱熹が道学内で置かれていた位置を示すものであった。永嘉永康学派や陸九淵の学派は朱子学との対立面ばかりが強調されてきたが、同時に措定してみると、道学の内部に片足を入れているか、あるいはその周辺に位置する存在であった。朱熹は道学内部の他の学派やその周辺と論争を繰り返しながら道学の集大成を図ったのである。なお一般に道統論は仏教や道教を意識して主張され、また仏教の伝灯論の影響を受けていると言われるが、それはあたらない。道統論は、道の伝授の形態、道の正統を保証する要素などの点で伝灯論とは根本的な差があるうえに、何よりも儒教内部の正統の争いだったのである。朱熹は北宋道学の基本文献の蒐集と注釈の作成、また道学の他学派や道学周辺の思想家との論争を通して、道学の集大成を成し遂げようとした。朱熹の学派の拡大とともに、道学は朱子学の別名になっていく。